

---

# 第一章 人形の町

黒簾 香菜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

第一章 人形の町

### 【Nコード】

N6398L

### 【作者名】

黒簾 香菜

### 【あらすじ】

「人間は儂く、愚かであるからこそ美しい……」

国家魔術師であるリリーダル・レオンハルトは友人(?)であるマイケルの話を聴き、開かずの部屋の秘密を探るため、勝手に鍵を盗んでしまう。

その罰として開かずの部屋で出会った不思議な美少女と謎の喋る猫と共に、人形の町での事件を解決する事になるのだが、そこで待っていた悲しい思いとは…？

通称天空の国と呼ばれるペピチエネチカ国を中心に繰り広げられる長編・ミステリアス&シリアスファンタジーです。

## 哀言葉（前書き）

正直、この話は第一章にはあまり関係ないかな・・・？と思いません。でも、本筋の話には重要なので入れてみました。

本筋は後で理解できれば良い！という方は、次話からどうぞ。

## 哀言葉

「氷の花」

はつきりと、そう俺は口にした。これは、あいつと会うきっかけになった花の名前で、あいつが一番好きな花だ。

その事を教えてくれたのは俺にだけだから、きっと良い合言葉になると思っ、二人で決めた。

誕生日にあげたのも、あの花を模した硝子のイヤリングだったし、何より、その花の事を語るあいつがとても嬉しそうだったから。

たった一人の親友で、

俺の好きな人だった。

そんなあいつを、今泣かしているのは誰だろう。

「氷の花」

いつも母親に綺麗にとかしてもらっていた髪を振り乱して、ビー玉位に大きな瞳を濡らして、何かを叫んでいる。

まるでこれじゃ、俺があいつを泣かしてるみたいじゃないか。

何で泣いてるんだろう？

それが訊きたくて、あいつに手を伸ばす。

『泣くなよ、……』

あれ？あいつの名前、何だっけ？

不思議と手は動かず、あいつの名前も思い出せない。

あれ？あれ？あれ？

そう言えば、俺、誰だっけ？家族は何人で、誰がいて、どんな容姿だったっけ？

どれだけ考えても思い出せず、逆に頭の中に霧がかかっていく。

「いけないで、いけないでよぉ……っ！」

舌足らずな言葉であいつが叫んでいる。何が行かないでなのだろう？よく分らない。

薄れていく視界の中で、俺は周りを見渡した。

そこで、やっと理解する。

あいつ以外に俺の周りにいるのは、不気味な黒い服を着た大人達。そして彼らが操作するのは

無慈悲な全てを消す機械<sup>マシン</sup>

「行かないでよぉぉぉおぉおおおお……！」

あいつの叫びが聞こえる。しかし、俺はもうあいつの顔も思い出せない。

「氷の花」

せめてこの言葉だけでも覚えていようと、失っていく記憶と薄れゆく意識の中でその言葉を繰り返し繰り返し反芻する。

そして、完璧に俺の意識が無くなった時。

俺はこの世から消え去った。

## プロローグ

少年は泣いていた。

暗く湿った部屋に閉じ込められたのが悲しくて。

独りぼつちなのが淋しくて。

彼は肩を震わせ、弱弱しく嗚咽していた。元々気が弱いのだ。怖い事、恐ろしい事があつたらすぐ泣いていた。

そんな彼を癒してくれる物はこの部屋には無かった。窓はなく、重い鉄の扉には鍵がかかっている。部屋の中央に古ぼけた椅子が置いてある以外、彼にそっくりな大量の人形しかなかった。その人形のせいで彼は余計に恐怖を感じたほどだ。

どれだけの間泣いていただろうか。

不意に外から物音がした。

……チャリン……

軽い金属音だ。何の音だろうと、少年はしゃくり上げながらもドアの鉄格子から外を覗いた。

「……良かった。無事だったんだな」

ドアをはさんだ向こう側にいたのは、少年の親友だった。どちらかと言うとガキ大将のような彼と少年は仲良しだった。

「何だ。また泣いてたのか？…本とに泣き虫だな、お前。本当に男か？」

軽口を叩きながらも大量の鍵を次々に鍵穴に差し込んでいる。少年を助けようとしているのだ。しかし、少年には分かっていた。そ

の鍵の中にこのドアの鍵は無いことを。

「……………無いよ」

「えっ？」

「その中にこのドアの鍵は、無い」

「何でそんな事分かるんだよ！やってみなきゃ分からないだろ！？」

「……………それでも、無い」

そう断言されたが彼は気にせずと同じ行動を続けた。

しかし、少年の言った通りドアの鍵はなかった。

その後、彼は何も言わずに帰ってしまった。

それが、二人の最後の会話だった。

その一週間後、頭部を殴られて出血したまま、少年は栄養失調と出血多量によってこの世を去った。

## プロローグ（後書き）

初投稿の黒簾くろすかな香菜です。初心者なので読みにくいと思いますが宜しくお願ひします。

・・・と言うか、初心者でかなりの長編なんかやろうとしています。何やってるんだ〜っ、私！



らを何とか避け、体勢を整えたレオンは攻撃をしようと前に出たが、運悪く風に乗ってきた書類に足を取られ、再び床に後頭部をぶつけるのだった。

「……………」

痛みに悶絶し、今度こそ動けなくなったレオンを蹴って部屋の隅に追いやったスマイクは、身支度を整えるとどっかり椅子に座った。頬杖を付くと顔を顰めながらスマイクは言った。

「それで？何故ここに来た途端、私に攻撃をしたのか、言い訳くらいは聞いてやるう。リリーダル・レオンハルト、タウアン・マイケル。丁度今日は仕事が少ないからな」

「あ、もう終つたんですか？將軍」

窓辺で呑気に煙草を吸っていた青年はこちらを振り返った。

彼は、タウアン・マイケル。地位は少尉だ。サツパリした長さに切つてある金髪に、一見優しそうに見える糸目。嗜好きで自由人な彼は無類の煙草好きだ。

「司令塔内は禁煙だ。何度も言っているだろう」

「何言ってるんですか？煙草が無くなったら、オレは死にますよ？」

「勝手に死んでろ」

スマイクは深く溜息をつき、復活したレオンと名残惜しそうに煙草を見ているマイケルを眺めた。

「…で？何故私を攻撃したのか、話は聞いてやるうじゃないか」

「あれは、三十分位前だったか？急に俺の部屋にマイケルが入って来て……………」

そうして、やっとレオンの口から今回の騒ぎの始まりが告げられ

た

？（後書き）

\*次回予告\*

レオンがスマイクを攻撃した理由とは……？  
レオン達はこれからの事件の始まりとされる少女に出会う……

？（前書き）

色々あって、更新が遅れてしまいました。．．．別に、更新のデ  
ータが三回連続で消えた訳じゃないんですよ．．．本当に。

??「香菜の機械音痴も相変わらずじゃのう。小5の時に電子レン  
ジを爆破させ、中一の時にはパソコンを．．．」

べ、別にわざとじゃないから良いんだもん！

??「そういう物かのう？」

そういう物で．．．．．って、きゃあああああああああ！

！！何であなたがここに居るんですか！？出番はもう少し後．．．

??「もう少しなのに何時まで経っても更新せんから苦情を言いに

．．．」

飛んでけ！大空の彼方に！

??「うわっ！我を片手で持つでないっ！ま、窓を開けるなあああ  
あああ！そして投げるなああああああああああ！」

ふうっ。厄介払い完了。それでは、本編に戻ります。

？

三十分前、レオンは軍の寄宿舍にいた。

仕事のために連続一週間働きっぱなしだったレオンは、自室のベッドでぐっすり眠っていた。春の心地よい暖かな風が、開いた窓からハラヴェラ（この国で咲く春の花）の花弁と共にそっと入り込む。

そんな穏やかな描写をぶち壊したのは、他ならないマイケルだった。

「おお~~~~~いつっ！！開けるよ、レオンハルト〜！」

鍵のかかったドアをドンドンと叩き、物凄く迷惑な男はレオンを叩き起こしたのだった。起こされた件のレオンは、勿論滅茶苦茶不機嫌だ。ベッドから上半身を起こすと、耳をふさいで、

「うる・さ~~~~~いつっっっっ！！近所迷惑だ、少しは黙れっ！」

・・・と、マイケルよりも大声で叫ぶのだった。しかし、今の時刻は午前十一時。この時刻で寝たままのレオンの方もおかしい。

ドタドタと室内を走り、ドアの所まで行くと鍵を外し、思いつき扉を開けた。その行動を予想していたのか、マイケルは呑気に扉を避けている。

「・・・何の用件だ。間抜け」

「うわっ、酷い呼び方。マイケルの『マ』は間抜けの『ま』とでも言いたいんですかね？」

軽口を叩きながらも、手を上にあげながら部屋の中に入ってきた。そんな彼を嫌そうな目で見送り、レオンは扉を閉めた。

部屋の中の中心に置いてあるテーブルと椅子の所まで行くと、マイケルは私服のポケットから煙草を取り出した。そして、指先に赤くてシンプルな魔方陣を出すと魔方陣に煙草を近づけて火をつけた。

あっという間に室内の天上に煙が充満し始める。レオンは窓まで行って、窓の大きさとほぼ同じ大きさの魔方陣を窓に固定した。すると、風が煙を外へと運び出していった。

「で？何の用件だ」

椅子に腰掛け、美味そうに煙草を吸うマイケルに、レオンはもう一度言った。

「隣の部屋に……」

「隣の部屋？俺のか？」

コクリとマイケルは頷く。レオンの機嫌の悪さで、大分大人しくなった。

隣の部屋は国家魔術師の一人が使用していたらしいが、三年ほど前からずっと閉ざされている。住んでいた住人さえ誰なのか分からず、今となっては『開かずの部屋』と呼ばれる始末。鍵もかかっていて、中に入る事すら出来ないのだ。

「隣の部屋に、火の玉がいるって噂なんだ」

「へへへえ。火の玉、ね」

「それも、虹色の！」

虹色の火の玉など、今まで聞いた事もない。火の玉といえば、赤か青だ。

普通で無い変わった物やおかしな事件。そういう事が好きなレオ

ンは、一瞬でその話に興味を持った。

「虹色の火の玉が『開かずの部屋』に……。面白そうだな」

「そうだろ、そうだろ！面白そうだろ、だから、隣の部屋をちょっと覗いてみようぜ。鍵を探し出して！」

「『開かずの部屋』の鍵か……。三年間も他の者に取られたりせず  
に済む所は……」

二人して考える。そして、ずっと考えて出た結果は、

「『將軍の所っ！！』」

？（後書き）

\*次回予告\*

そんな変な理由でわざわざ將軍が鍵を貸す訳も無く、追いつかれ  
るレオンとマイケルの二人。  
しかし、こっそりレオンが……！！？

？

話し終わると、スマイクは大きく溜息をついて立ち上がった。そして、目の前にアホが二人居るかのようにつくりと話し始めた。「そんなおかしな理由で、鍵を渡すわけが無いだろう？ 脳があるならちゃんと使え。そもそも、貴様らの行動は……」

その後、スマイクの愚痴は二十分間続いた……

二十分後、きりのいい所でレオンが話しに割り込んだ。

「はいはい、分かりましたよ。反省すりゃ良 んだろ？」

「本当に反省しているのか怪しい所だが、まあ、今日はもう良いだろう。二人は休日が終わったら覚悟しておけ。仕事を普段の倍にやる」

マイケルとレオンは今のうちに散々文句を言うと、大人しく部屋を出て行った。

……トン、トンツ……

ドアをノックする音がした。

「失礼します……」

澄んだ高めの声と共に軍人の女性が入ってきた。不思議そうな顔をしたまま、コーヒーを片手にスマイクの机の前までやって来る。

「將軍、コーヒーをお持ちしました。それと……」

「なんだ？セルビー」

彼女は、レミニン・セルビー。南部軍の大尉である。外国人で、

綺麗に切りそろえた黒髪と赤い瞳が印象的だ。南部軍一の秘密主義者でもあり、情報通でもある。

セルビーはコーヒーを机の上に置き、上着の裾を整えたスマイクに話しかけた。

「先程、レオンハルトさんとマイケル少尉が部屋を出て行きました。何かありましたか？」

「いつものようにバカなだけだ。例の部屋の鍵が欲しいとな」  
「左様ですか」

窓辺に寄りかかり、春風を堪能しながらポツリと呟いた。

「やっと時間が満ちたようですね……」

「?…何か言ったかね？」

「いえ、何も」

スマイクは軽く疑問に思ったが、特に気にせず話を切り上げた。それとは逆にセルビーの方は慌てて話を変えた。

「それで、例の部屋の鍵はちゃんとありますか？」

「手抜かりは無い。ちゃんと腰のポケットに……」

ポケットに手をつ突っ込み、鍵を探す。ポケットには物を落とさないうちにチャックが付いている。それを開け、閉め、もう一度探す。最後には机の上に中身を全て出して探すありさまだ。

「………無い」

「はっ？」

驚いた声を上げて、セルビーも鍵を探す。

「……ありませんね」

溜息をつき、近くの椅子に座る。そして、小声で話すのだった。  
「そう言えば、レオンハルトさんが妙に嬉しそうでしたね……？」

その話を聞くと、スマイクは怒りに満ちた声で叫ぶのだ。

「あのクソガキ共おおおおおおおおおおおおおおおお  
っ！！！！」

その怒りを拳に宿し、怒り発散のために机を殴るのだった……

「……新しいデスクが必要なようですね」

？（後書き）

\*次回予告\*

まんまと鍵を盗み出したレオンとマイケル。  
開かずの部屋に入り込み、そこで見たものは……？

？

レオンとマイケルの二人は、まんまと盗み出した鍵を片手に『開かずの部屋』の前に立っていた。

「それにしても、いつの間に鍵なんて取って来たんだ？ 將軍、絶対に怒るぞ〜」

「戦ってる間にコッソリな。將軍の事は・・・まあ、戦った時点で罰が与えられるのは分かっているし、平気平気」

レオンは手をひらひらし、そのままドアを鍵で開けた。部屋の中は予想通りに・・・埃だらけだ。三年間も放置されていたせいであちこちに白い埃が溜まっている。

「うっわ・・・凄〜」

マイケルがポツリと感想をもらし、レオンの後に続いた。室内は女性の物なのか、カーテンなどは可愛らしいピンク色だ。元は美しい部屋だったのだろうが、埃のせいで霞んでいる。

全てが埃に覆われた中で、一箇所だけ埃をかぶっていない物があった。窓辺に置いてあるベッドだ。真っ白なシーツがかかっている。そのシーツには青い魔方陣が付いている。

「・・・で？ 虹色の火の玉は？」

「・・・」

全く例の物が見当たらないためにマイケルは返事が出来ない。話をそらす為に、マイケルは埃をかぶっていないベッドを指さした。

「ほ、ほらっ！ あれ、何だろうな〜」

「埃避けの魔法だろ。長期の旅行に出かける時に家具などに掛けておくと、埃を避けてくれる。部類は風属性、魔力によって継続時間は違ってくる。使用方法を変えると、雨除け等にもなる」

「流石だな。オレは外人だから魔法は使えないから、よく分からないし」

魔法は、何故かこの国

ペピチエネチカ国

に先祖代々

暮らしている一族の者達しか扱えない。だから、外人であるマイケルには扱えないのだ。ただし、外国人もお金を払えばちよつとした魔法は扱えるようになる。魔力を体内の一部に入れる方法があるそうだが、たくさん使うと一気に無くなってしまうらしい。

「ちよつと中身見てみようぜ。埃避けのシーツって買ったら高いしさ。そんな物をわざわざ使うんなら、きつと凄い品なんだよ」

マイケルはそう言つてシーツを思いっきり引き剥がしてしまった。埃が宙を舞い、視界が悪くなる。咳をしながら、レオンが窓を開けようとする、目の前を何かを通つた気がした。

「……?」(気のせいかな?)

ミユエ  
力を外してもらつた事、感謝する

声が聞えた。窓を開け、埃が落ち着いた所で周りを見渡した時には、レオンとマイケル以外いなかった。そのマイケルは、一点をずつと見つめている。何かと思つてレオンがその視線の先をたどると・  
・  
・  
・  
・  
・

……ベッドの上に、美しい顔立ちの人形が眠っていた。

？（後書き）

\*次回予告\*

ベッドの上にあるのは、ただの人形ではなかった。  
否、人形ではなかったのだ。

その人形は一体……？

？

その人形はとても大きく美しく、普通の人間ほどの大きさがあつた。少々幼さの残る顔だちとは逆に、体の凹凸がはつきりしている少女の人形だ。睫毛は長く、栗色の軟らかくカールした髪は腰よりも長い。通常の人形よりも真白な肌は滑らかで染み一つ無い。

白いシンプルなワンピースを纏ったその人形は、首にネックレスをつけていた。

「うわ。見るよ、レオンハルト。虹色に光る宝石のネックレスなんて、オレ、見たこと無いや」

そう言つてネックレスの先にある宝石を手に取りうとするマイケルだが、

「・・・あれ？」

何故か手に取れなかった。そのまま、手が人形の胸元を彷徨つていた。

「何してんだ？どうかしたのか？」

それに気付き、レオンが同じ所を見る。よくよく見ると、宝石は人形の胸元に埋まっていた。金色のチェーンは入墨だ。

「変な人形・・・」

レオンがそう呟いた時だ、人形の眉がピクリと動いた。

「本当に、変な人形だよな。この国では見たことが無いし、外国の人形かもな」

マイケルはそれに気付かずはまだ宝石をつついていて。 (やばい、その人形って・・・) そう思い、マイケルを止めようとしたレオンだが、間に合わなかった。

人形が、パツチリと目を開けたのだ。

澄んだ青い瞳を瞬かせ、人形……否、少女が放った第一声は

「い、嫌ああああああああああっつつつつつつ！！」

悲鳴だった。

それもそうだろう。目を覚ました途端、部屋に見ず知らずの男が二人もいるばかりか、その一人は自身の胸元をつついていているのだから。

少女はガバリと起き上がると、マイケルを思いつきりぶつ叩いた。その少女のことを人形だと思っていた哀れなマイケルは、頬を真っ赤に腫らしながら顔面を床にぶつける破目となった。

「な、何なんですか？ 一体」  
驚きで目を見開いたまま、その少女は呼吸を落ち着かせてレオンを見つめた。

「あなたは、誰ですか？ 私の部屋に何か御用でも？」  
「俺はリリーダル・レオンハルトだ。国家魔術師の」  
そうレオンが名乗ると、大きな目をもっと大きく見開いて少女が名乗った。

「私は、あなたと同じ国家魔術師のクラウドス・シエランです。レオンさんと呼んでもよろしいですか？」

そう言ってシエランはベッドから飛び降りると、運悪く床にのびていたマイケルの腹を踏んでしまうのだった。

？（後書き）

\*次回予告\*

床にのびたマイケルを放って、レオンはシェランの部屋の掃除を手伝う破目に。

掃除の終わった後、シェランの友達（？）と出会うのだが……？

？

床にのびているマイケルは置いておき、ウォルタニアはシエランの部屋の掃除をする羽目になってしまった。

「何で俺がこんな事・・・」

ブツブツと呟きながらも、両手に赤、青、ピンク、緑色の大小様々な魔方陣を展開させて部屋を掃除していく。部屋中のあちこちで水が跳ね、熱風が水を乾かし、箒が飛び、<sup>すす</sup>煤けた床が直っていく。数分も経つと部屋の殆どが綺麗に蘇っていた。

掃除され、綺麗になった所からシエランは何かを探していった。どうやら小さな物らしくベッドやソファの下、テーブルの周りを見回っている。

「何してんだ？ 落とし物？」

掃除をやり終えたレオンがシエランに質問する。まだ何かを探しながらもシエランは答えた。

「私のお友達。何処かにはいると思うんだけど・・・」

「そんなに小さい友達なのか？」

「うん」

そうやって二人が話していると

『我はここにいるが、随分と起きるのが遅れていたのう。すっかり待ちくたびれてしまったぞ』

と言う若い女性の声が天上から響いてきた。それに続き、マイケルの腹に今度は黒い影が落つこちる。奇妙な声を上げ、体を『く』の字に曲げて、またもやマイケルはぶつ倒れてしまった。(哀れマイケル・・・安らかに)などと思いつつ祈りを終え、シエランの腕の中に納まった黒い物をレオンは覗き込んだ。

子猫……？である。真つ黒な、その場だけ闇に染まったような黒い子猫だ。尾は二つに分かれて瞳は黄色く、首に黒と黄色のダブル模様の真珠を身に着けている。先程の声はその猫が話したよ  
うだ。

「これが……シエランの友達？」

「うん」

大真面目に頷くシエラン。疑心暗鬼になりながらもその猫を見よ  
うと顔を近づけたレオンだが、猫に睨まれてしまった。おまけに、

『のう、氷華<sup>ひよつか</sup>。この不躰な女は何者じゃ？』  
などと言ってくる。

「五月蠅いっ！俺は男だっ！」  
と苦情を言うが

『のう、氷華。国軍の者に挨拶には行かんのか？』

完璧に無視だ。それにはシエランも気付かず、呑気に返事を返し  
ている。どうやら南部軍に向かうらしく、その準備をするらしい。

猫はシエランの腕から飛び降り、ドアへと向かっていった。

『シエランが着替えるのだ。さつさとそこで寝ているバカと共に部  
屋を出て行け』

「誰がバカだよ、全く」

愚痴りながらもマイケルを魔法で浮遊させてレオンは部屋を出た。  
隣の自室へ行こうとドアを開けると、隙間から猫が入り込んでくる。  
その事に顔をしかめ、文句を言う。

「何でついて来るんだよ。このアホ猫が」

『誰がアホじゃ。ならば貴様は究極のバカじゃな。良かったのう、  
世界一になれて』

「そんな物で世界一になって喜ぶほど、俺はくたびれてねーよ、あ  
ほ・ね・こ」

そう言われ、器用に顔を真っ赤にして怒ると、猫はやっと名乗り

を上げた。

『我の名はサエじゃ！バカにするでない』

そう言っ て部屋に入った後のレオンとサエの口喧嘩は、シエランが着替え終わるまで続いたのだった。

？（後書き）

\*次回予告\*

着替えと準備を終えて部屋を訪ねてきたシエランは、軍の元へ出かけて行った。

一人と一匹を見送ったマイケルとレオンはある重大な事に気づいて・・・？

？前編？

髪を整え、服も着替えた。最後に黄色で縁取りされた白い半袖の上着に袖を通し、黄色のリボンをギュツと縛る。

「よしっ！」

軽く掛け声をかけて、シエランは椅子に引つ掛けたバッグを片手に廊下へと出た。栗色の髪を左右一部だけ三つ網に縛り、その先に髪飾りをつけ、白とピンクの花柄のワンピースに先程の上着を着込んで白い靴を履いている。

廊下を数歩だけ歩くと、あっという間にレオンの部屋に着いた。茶色のドアを開け、中を覗きこむと

「黙れっ！このバカ猫！」

火炎が飛んできた。

十 十

『のう、そのオカマ』

『俺はオカマじゃねえ』

『ならば、オカマもどき』

『何でそう変わるんだよ……』

レオンの部屋の中、マイケルはソファーにぐったりと寝込み、サエは窓辺で日光浴。首もとの真珠が日光に当たってきらきらと光り輝いている。

椅子の上に胡坐をかき、人差し指を一本立ててレオンはサエに向

かって説明した。

「いいか、俺はリーダー・レオンハルトだ。オカマでも女でもなく、立派な男だ。分かったか？」

大真面目に話すレオンを完全無視してサエは呑気に窓の外を眺めていた。

『氷華、遅いのう』

そんな態度のサエに、レオンは軽くキレかかるが根性で何とか押さえ込んだ。

「俺は大人だ。これ位でキレルわけには・・・」

ペピチエネチカ国では十六歳で成人なのだ。

『で、そのオカマ』

「もう我慢できねーっ！！」

椅子を倒し、勢いよく床に着地すると拳を握り締めてサエに向かって振り下ろす。それを軽く避けてテーブルの上に着地したサエは悠々とレオンを見下す。

『これ位で怒鳴るような輩の何処が大人じゃ？鼻で笑ってやるわっ  
』！』

？前編？（後書き）

色々な事情で、この話は前後編に分けることになりました。

？後編（前書き）

いや、すっかり更新が遅れてしまって……はははははは……

レオン「はははははは……じゃねーんだよ！何だ、この遅さは！？」

そんなに怒ってもしょうがないんですよ？これは運命なのですっ！

サエ「……なにが運命じゃっ！どうせ勉強が上手くないかなかったのじゃろ！」

うつ……正論を言われると辛い……

シエラン「今度はなるべく早くね？」

はい

？～後編～

『これ位で怒鳴るような輩の何処が大人じゃ？鼻で笑ってやるわっ！』

「この猫ムカつく！お前なんか草でも食べてる！」

腕を振り回して叫ぶレオン。まるっきりガキである。

『我は草は食わん。青臭い』

「だったら何食べんだよ！？」

『ちょこれいとじゃ』

チヨコレート：カカオ油と砂糖を混ぜて固めたお菓子。昔は大  
人しか食べてはいけない食物だった。

・・・

「お前本当に猫かよ・・・？」

『貴様こそ本当に男か？』

「黙れっ！このバカ猫！」

レオンは掌に赤い魔方陣を展開して、そこから噴出した火炎をサ  
工に向かって投げつけた。それをも生意気に避け、火炎が向かった  
先はドア付近の壁。丁度ドアを開けて入ってこようとしたシェラン  
が驚いている。

そんなことにも気付かずに、また火炎を放とうとするレオンを押  
さえつけて止めたのは目を覚ましたマイケルだった。壁に当たった  
火炎はシェランが魔法で消し去り、何とか一段らくしたのだった。

サエともう一度喧嘩するのを防ぐ為、レオンをソファーに座らせて、シエランはサエに早く出掛けようとサエを急かした。しびしびと行こうとするサエにレオンは話しかけた。

「シエランとは随分仲がいいんだな？やっぱり友達だからか？」

先程の仕返しだと言うように堂々と鼻で笑ったレオンに、以外にサエは怒らなかつた。

『我など友ではない。こんなもの……。ただの罪滅ぼしじゃ』

そう語るサエは、儚く消えてしまいそうで

『否、それでもまだ足りぬ』

何よりも、そう言うサエを見るシエランが凄く悲しそうで

それを言った事に、レオンは後悔した。扉を閉めて歩いていく二人（一人と一匹？）の足音が遠ざかり、気付いた時にはもう居なかつた。

「……あ」

何かを思い出したように手を叩き、マイケルはレオンを置いて走

り去ってしまった。訳も分からずにそれを追いかけた。

「急にどうしたんだよ!？」

「二年前、軍で巨大な建設工事があっただろ？」

「それがどうか……あっ!」

やっと気付いたようなレオンに、マイケルはこくりと頷いた。

二年前に南部軍の位置は建設工事に変更されたのだ。

「絶対に迷う」

？～後編～（後書き）

\*次回予告\*

急いでシエランとサエを追うレオン達。  
考えは命中し、二人はまんまと迷ってしまったのだった・・・

？

「いや、美しい。初めてお見かけいたしましたよ。貴方のよう  
な方は」

「……はあ……」

レオン達と分かれた後、見事に迷子になってしまったシエランと  
サエはあるカフェに入っていた。スーツを着た外国人の男性に声  
をかけられ、上手く断れなかったのだ。

「で、どうでしょう。私の会社でアイドルでもやってみては……  
？」

「いえ、私は……その……ちょっと行く所が」

「良いですよ。貴方のような方は、きっと有名になられて大金持  
ちになられますよ」

相手はさっきから似たような事ばかりを言っている。

しかし、「アイドル」が何なのか全く分からない彼女には断る事し  
かできない。

『のう、氷華。こんな輩は放って置いてサツサと軍を探さなければ。  
』

シエランの隣の椅子にちょこんと座ったサエが、そう囁いてくる。  
それを聞いて微かに頷き、席を立とうとした。

「すみません。私、急いでいるのでそろそろ……」

「まあ、そう言わずにもう少しだけ」

相手はそう言ってシエランの腕を掴んできた。

軽く舌打ちをし、サエが臨時体勢に入る。「少しの間」と言われて話を聞かされていたが、もう十分以上もここにいる。

腕を振りほどけないまま、困ったシエランを助けたのは……

「おい、その外人」

一人の軍人だった。

彼は相手の腕を振りほどくと、シエランを背に隠し威圧的に言った。

「どうやら、話を聞いていると何かの勧誘のようだが、許可証はあるのか？外国の団体勧誘をする際、必ず許可証が必要なを知っているだろうか？」

その迫力にも負けず、相手は更に名刺を差し出しながら言う。

「私はこういうもので……」

「そんなことは聞いてない」

ピシヤリとその言葉は跳ね除けられた。

「許可証を持っているか、いないか。それだけを聞いている。持っていないで勧誘を行った場合、罰金があるのだが……」

そこまで言われ、お茶を濁す事に失敗した相手はさすがごと退散

して行った。

？（後書き）

\*次回予告\*

シエランを助けてくれた軍人とは・・・？

？

外人が逃げて行った後、その人を退散させた軍人は、腕を組んでシエランのことを見ていた。まるで品定めでもするように、じろじろと。

彼は三十歳位だろうが、やけに若々しく見えた。短い短髪の下で光る目は、ひどく荒んでいた。

「あ、あの！ありがとうございます……」

軍人の視線に戸惑いながらもお礼を言おうとすると、

「お前、外国人か……？」

いきなり質問された。

シエランの見た目は、この国の人とはかけ離れている。そして事実、シエランは外国人だった。

相手の目を上目遣いに見ながら、コクリと頷いた。それと同時に、シエランの肩にサエが飛び乗った。

「あのなあ、観光者ならこの国の情勢は知ってんだろ？少しは気を付けてくれよ……」

頭をめんどくさそうに掻きながら、溜息を吐く。そんな相手にどう反応をしたらいいのか、シエランにはよく分からなかった。

「すみません、あまりよく知らずに来たもので……」

「普通、観光する国の情勢くらい調べておくもんだろ？いいか、こ

の国は美人が多いことで有名だから、ああいうスカウトが多いんだ。そして、そのグループに入ったりしてひどい目にあったり殺されたりにしている人もいる。だからその取締りが厳しいんだ。魔法使いのいる国として、魔法を他国の武力として利用されるのを防ぐ意味もある。分かったか？」

いい加減な対応をしながらも、わざわざ詳しく説明してくれた。鋭い瞳に睨まれ、萎縮しながらも頷くシエランを見て、その目が優しくなった。

「じゃ、次は気をつけるよ」

ポン、と頭に大きな手が乗せられる。彼は優しく何度か頭を叩くと、シエランに背を向けて喫茶店の外へ足を向けていた。それに続いて、シエランも喫茶店の外へ出る。先程の外国人がお金は払ってしてくれたのか、店員に呼び止められることはなかった。

振り返らずに歩いていく背を見て、シエランは聞いた。

「あの、南部軍に行く道を教えてくれませんか？」

その途端に彼の手から水色の魔方陣が展開され、そこからシエランに向けて風が吹いた。どうやら、風の後を追えば良いようだ。

「ありがとうございます！」

大分遠くへ歩いてしまった彼の背に礼を言うと、ひらひらと手を振っていた。その行動に、シエランは思わず笑みを零したのだった。

「シエラン！」

レオン達がそんなシエランに追いつく。大丈夫かと心配するレオンに、シエランは返事を返した。

「おい、あいつって……」

ゆっくりと歩いていく軍人の方を見て、マイケルがレオンに声をかける。

「あいつ、アレがあってから変わったよな」

「あれって？」

そう質問したシエランに、複雑そうな顔をしてレオンが答えた。

「あいつ、フライネル・セレスターっていうんだけどさ、一、二年ぐらい前に起こった事件で家族を亡くしたんだよ。それも、最愛の妻と娘を自分の手で……」

「あれは、そうしなければならぬ、どうしようもない事だったけどな……」

セレスターの弁解をするように、マイケルがそれに続いた。

少し暗い空気が、彼らを包みこんでいた……

？（後書き）

\*次回予告\*

南部軍に辿り着いた彼らにまかされた、大変な仕事とは・・・？

？

南部軍に辿り着いたレオンとマイケル、シエラン、サエは、スマイクの所へ行くことにした。もちろん、将軍に怒られる可能性のあるレオンとマイケルは付き添いである。

将軍の執務室へ向かっている途中。

「あらっ？」

セルビーが、丁度一階の資料室から出て来たところだった。何かの調べ物をしていたのか、手には大量の書物やファイルを抱えている。

自分達が鍵を盗んだ事を知っているであろう人物に、レオンとマイケルは思わず不自然に体を硬直させた。

「あ、セルビー、さ、ん……ど、ど……も」

「え〜っと、も、もしかして将軍から……何か話とかは……？」  
二人の異常な行動に不思議そうな顔をするシエランとサエを横目に見て、セルビーはにっこりと微笑んだ。

「ええ。確か、レオンハルトさんは執務室まで来るように、と。それからマイケル少尉には……」

そう言っって書物をいったん床に置き、軍服のポケットを漁りだした。そして、お探しの物を見つけたのか満足そうに頷いた。

手に持ったそれは、白いメモだ。

二つに折り畳んだメモを広げ、そこに書いてある事と呼んだ。

「ええっと、『マイケル少尉。貴様は休みが終ったら覚悟しておけ。

お前のために大量の仕事を用意しておいたからな。……追伸。今度指令党内に煙草一箱でも持ってきたら、貴様を下界行きにしてやるからな』……以上です」

“下界行き”と言う言葉を聞き、顔面蒼白になって動けなくなるマイケルである。そんなマイケルの胸ポケットに使用済みになったメモを突っ込むと、セルビーはレオンに向き合った。

「レオンハルトさん。早く將軍の所へ向かった方が良いと思います。そして……」

シエランのほうを向いて、

「あなた方も」

優しく微笑んだ。何か裏がありそうな微笑に小首をかしげるシエランだが、気にせずレオンと共に將軍の執務室へ向かった。

「失礼します」

恐る恐る言ったので震えてしまった声を無視し、スマイクは冷静だった。机に頬ずえをつき、一枚の書類をレオン達に見せた。

「国家魔術師リリーダル・レオンハルト、同じくクラウス・シエラ

ン。諸君ら二人に、アルフェン町での魔薬事件の解決を命じる」

？（後書き）

\*次回予告\*

レオンとシエランに命じられたアルフェン町での魔薬事件とは・  
・？

?? (前書き)

表紙絵を新しく書き直しました。どれがどのキャラなのかは、考  
えてみてください。 (ただし、後ろの影は後で出てくるキャラです)

> i 2 1 3 8 6 | 1 5 6 6 <

???

部屋に入った途端に仕事を頼まれた二人は、困惑するしかなかった。とりあえずソファーに座り、スマイクと向き合っている。テールの上には先程の書類が二人に見えやすいように置かれている。「アルフェン町での魔薬事件……って、最近ニュースなんかで載っている?」

「そうだ。実はこの事件は南部の管轄内だな……おまけに、ややこしいと来ている。今までに三人派遣したのだが全員白旗を挙げてしまった。Sランクの者が何とか魔薬対策の陣を完成させた位しか解決できていない」

「そうやってすらすらと話を進めてしまおうスマイクとレオンの二人だが、話に着いていけない者がいた。」

シエランはサエと共に小首を傾げ、早速質問した。

「あの……私、全然話が分からないんですけど。まず、Sランクとかって何ですか?」

「ああ、そう言えばクラウス殿はまだ一度も国家魔術師としての話をしておりませんでしたね?」

慣れない相手ということなので、急に口調を和らげるスマイクである。そんな彼とは違い、逆にレオンは顔をしかめた。

「大体、何でシエランは今まで仕事やらなかったんだ?サボったらすぐに資格を剥奪されるだろうし……」

『貴様のようなアホとは違うのじゃ』

「休暇、と言う事になっていたんだ。かなり長めにとってあったが、ランクがなかなか高かったのでこちらとしては受け入れるしかなかった。……そうだ、ランクについてだったかな?」

「はい」

レオンの疑問も解決(?)し、やっと話が元に戻った。次はシエ

ランの疑問の番だ。

「国家魔術師等の国家資格には、基本的にランクがついていてね。国家魔術師の場合、下からBランク、Aランク、Sランク、SSランクと四つある。特にSとSSは人数が少なく、国としては重宝している」

「ちなみに俺はSSな」

説明の間に迷惑にも割り込んでくるレオンである。

「そして、クラウド殿はSランク。つまり上の方だ。仕事をこなせば、その分国から金がもらえる。もらえる金額もそいつのランク次第ということだ。……ちょっと訊きたいが、クラウド殿は所持金はいくらかな？」

「所持金……お金は、まだ無いんです」

さすがに所持金ゼロと聞き、固まる男性二人。

しかし、しばらくするとレオンが話題を元に戻した。

「で、アルフエン町の事件って、一体どんな？ ニュースでは詳しく出て無いけど」

「話したとおり魔薬事件なのだが、その魔薬が問題でね。まだ流出先も犯人もつかめていない。ただ、その薬の効果だけは分かっている。ある一定の量が人間の体内に入った場合、その人間の感情が消える。しかし、脳は働いているようで、体は他人に言われたとうりに自由自在に動く。しばらくして薬が体内からある程度抜ければ意識は戻る。ただ一つの問題は……」

話のトーンを少し下げた。何か少し言い難そうな感じである。

そんなスマイクに、大人しく話を聞いていたサエが助言した。

『感情がなく、意識も無い。つまり、その体の異常が外部には全く分からず、そのまま水分不足や便を出さないでいたことが原因で起こる大腸癌等で死に至る……』と云うことか』

しゃべる猫。と言うよりも理解力の良さにスマイクは感心した。

その後、特に理由も言わず、二人で仕事をしてこいと言っスマイクに促され、アルフェン町行きの切符を買った二人だった。

?? (後書き)

\*次回予告\*

アルフェン町に行く支度の途中に、シエランとサエが見つけた不思議な物とは……？

???

軍の寄宿舎に戻った二人と一匹は、レオンの部屋にいた。これから出発の準備をするのだ。

「じゃあ、俺が汽車の切符を持つてるから。用意が終ったら来てくれ」

スマイクに渡された切符をチラつかせ、部屋に入ろうとしたレオンの腕を取って、シエランは聞いた。

「あの、レオンさん。ちょっと訊きたいんですけど」

「な、何だ？」

「私の部屋の鍵って、何処にありましたか？誰が持っていましたか？」

腕を？まれたまま思いつき顔を近づけて訊いて来るシエランに頬を赤くするが、すぐにレオンは答えた。

「將軍だけど……」

「ありがとうございます！」

レオンが答えた途端に腕を放し、シエランはサエを肩に乗せて走って行ってしまった。

「……一体何なんだ？」

寄宿舎の一階、管理人室の隣に電話がある。軍にかける場合は無料だ。

シエランは受話器を握り、すぐに三桁のボタンを押した。

「もしもし、南部軍將軍のスマイクさんに繋げて下さい」

軍に繋がった途端に用件を伝えた。すぐにスマイクに繋がり、彼

の声が聞える。

『その声はシエランさんかな？ 一体何の用ですか？』

「スマイクさんが、私の部屋の鍵を持っていたと聞いたので。 . . .

・ 一つ訊きたいのですが、誰が貴方にその鍵を渡したんですか？」

『答えた後に、こちらも質問してよろしいかな？』

了解を得て、スマイクは語り始めた。

三年前、一人で家に帰る途中に女性に声をかけられたこと。

その女性は白髪に漆黒の目の見目麗しい姿だった事。

彼女から、その部屋の鍵を渡され、誰にも渡さぬように頼まれた事。

話し終わると、スマイクは早速質問した。

『で、今度はそちらに答えてもらおう。君は純粹な外人。つまり、この国の人種の血は流れていないはずだ。では何故、Sランクになるほどの魔力を持っている？所持金が無いと聞いたが、すべて魔法をかうのに使ってしまったのか？どうなんだ？』

「私は、魔法を買ってはいません。ただ、これだけは言えます」

一つ、溜息をついてシエランは言い切った。

「この力が使える者達は、他にもいるという事です。少なくとも、スマイクさんはその三人に出会っています」

『待て、一体どういう . . .』

スマイクは会話を続けようとしたが、シエランは受話器を元に戻した。そして、肩に乗ったサエにそつと語りかけた。

「サエ、やっぱり私は、彼女の考えが読めない。一体あの人は何をしようとしているの？ 敵しいと思ったなら急にこんなことをしてみたり . . . . .」

『考えても始まらない。直接聞いてみれば良からう？』

「知ってるでしょ。どうせ答えてなんかくれないわ」

そつ言いながら、静かに部屋へと戻って行った。

部屋の中、それは静かにあった。姿鏡の中に浮いている。それを見つけたサエは、シエランのバックの中にそっと入れた。シエランは服等を用意していて、それに気付かない。

『まさか、奴がこの国にいるのか・・・？』

ポツリと呟いたサエの声は、シエランには聞えなかった。

?? (後書き)

\*次回予告\*

次回は間話をします。プロローグに似たような感じですか。

雨が降ったら傘を差して

？

雨が降っている。春なのにそれはとても冷たく、今にも凍えそう  
だ。

「冷たいか・・・ 。ごめんな、助けられなくて・・・  
ごめん」

薄暗い中浮かび上がっているあいつの墓は、日にちが経って色あ  
せている。でも、あいつの優しさは色あせない。今まで俺に与えて  
くれた優しさは、俺の胸の内に残っている。

毎日花を送っているが、いつも誰かが先に花を置いていつている  
らしい。野の花が一輪そつと、そして大き目の花束と中位の花束が  
一つずつ。

・ 雨の中、それらはまるで泣いているかのように見えた・・・

俺はずっと、一人だった。親は町一番の権力者。親切で、人付き

合いも良かった。

大人の俺に対する態度は良かったが、その裏には欲望が見え隠れしていた。

学校に行ってもそれは同じだった。先生の特別扱い。それによる生徒達の恨みの視線。

だんだん息苦しくなっていく。

そんな環境から逃げたくなっただことは何度もあった。でも、実行できなかったのは俺の弱さが原因だと思う。

しかし、いつかは必ず限界がくるものだ。俺が家から逃げ出したのは、あれが最初で最後だと思う。あの日も、こんな風に冷たい雨が降っていた

体がだるい。

足が痛い。

雨避けの魔法を使わないせいで体も冷えきっている。

「はぁ………」

上を向いて溜息をついたが、そんなことで不満が消えたりはしない。目に映る空は俺の心の中のように曇りきっている。

逃げてよかったのだろうか………

そんな後悔がいまさら胸の中にくずいた。それでももう遅い。今いる場所は、家からかなり外れたこの町の端っこに位置している。家から車で二十、三十分はかかるだろう。

小さな公園のベンチに一人で座りこんで目をつぶった。時間帯と雨が重なり、人影は無い。だんだん暗くなり、ぼつぼつと家の明かりが増えていく。

雨音だけがこの空間を満たしていた。

「どうしたの？」

それは、とても急な事だった。雨が体に当たってこない。不思議に思っただけ目を開けると、目の前に同い年くらいの男の子が立っていた。雨避けの魔法ではなく、何故か外国の傘を差している。片手には袋を持っており、買い物帰りということだけが分かる。

「風邪、ひいちゃうよ？雨避けの魔法もして無いし……」

不思議そうに言いながら手に魔法陣を作って俺の頭に乗せると、魔方陣の所だけが雨をはじいていく。

「これで濡れないね」

そう言っつてニツコリと微笑んだ顔が、少しだけ青ざめていた。

嬉しかった……

恐らくはじめて貰えた、無条件で得る他人からの優しさ。それが凄く、心に染みだ。

これが、あいつと俺の出会いだったのかもしれない。

雨が降ったら傘を差して

? (後書き)

\*次回予告\*

雨の中で出会った彼。彼との思い出は、これまでの何倍も幸せな物だった。

しかし、着々と別れは迫っていた……

雨が降ったら傘を差して

？

その少年は、リクと名乗った。どうやらこの近くで暮らしているらしい。家に帰るつもりも無い俺は、帰る家が無いと言ってリクの家泊めてもらうことになった。

リクの家族は父と母と、兄妹がリクも合わせて四人。なかなかの大家族だ。小さな家だから俺も入れると家の中はぎゅうぎゅう詰め。それでも、俺の広くて人の少ない寂しい家よりはずっと暖かい。

「何か、安心する・・・」

「ん？何が？」

ポツリと呟いた俺の言葉を聞いたのか、リオが話しかけている。何でも無いと断って、部屋の隅の椅子にちょこんと座り込む。

「ちょっとお父さん、私の教科書何処にやったの？」

「さっき筆筒の上に乗つけたの見かけたけど。姉ちゃん」

「ちょ・・・お父さん、そんなところに置いたらわかんないじゃん！」

「貴方も相変わらずねえ。拾った物筆筒の上に置いちゃうの」

「教科書はテーブルの上にあったと思うけど？」

「いや、悪い悪い。ちょっと邪魔だったから」

軽くもめながらも仲良く笑い合う。今まで感じた事も無い柔らかな暖かさが家の中を包んでいる。

俺の家には無い暖かさ。その感じがやけに胸に染みる。

もしも俺の家も、あんな感じだったら・・・

ふと、そんなことを考えて首を振る。そんなことに、なることな

どおりえないのだが……

リオの父は、何処かで見たとあると思つたら、この村の中でも特に人形作りが上手いと評判の人だった。その人形でかなり金を稼いだらしいが、リオのせいでかなり消費してしまつたらしい。

リオは、病気だつたのだ。

魔法使いは体内に魔力を勝手に生成する事が出来る。そしてその体内の魔力を魔法陣を使って外に出し、魔法を使う。

しかし、リオの場合は体内の魔力が生成されない。否、生成する事ができないのだ。

だが、今の世の中では魔法を使わないと出来ない事が多い。その為、人工的に体内に魔力を注入する。

その分の医療費が高額なのだ。だから、あまり魔力を行使しないようにする。

だから、雨避けの魔法を使わずに傘を差していたのだ。そんな中、リクは俺に雨避けの魔法を掛けてくれた。

ただ、俺が風邪に引かないようにするためだけに……

「ごめんな。魔法、使わせちゃまって」

「気にしなくていいよ。僕が勝手にやった事だから」  
そう言って、リオは明るく笑う。

二日目には勿論、俺は連れ戻されてしまった。

それでもリクとリクの家族は笑いながら見送り、俺を訪ねてくるようになった。俺もリクの家を訪れ、リクを中心に少しだけでも友達が増えた。

毎日が幸せで、いつか別れが来るなんて事考えてもいなかったのだ。

悲劇が起こったのはリクと出会ってからちょうど一年後。

今から二年ほど前のことだった……

雨が降ったら傘を差して

? (後書き)

\*次回予告\*

今から二年前、急にリクはいなくなってしまった。  
それが、悲劇の一番の始まり……

雨が降ったら傘を差して

？

それは突然のことだった。

昨日はいつも通りにリクの家へ行き、いつも通りに家へ帰った。そして次の日、何の予告もなしにリクは姿を消していた。

「こんにちは、おばさん。リクは？家には居ないみたいなんですけど？」

大抵そんなときはリクは病院に行っているか、家族と買い物に出かけているのだ。今日リクがないのも、そのせいだと思っていた。しかし、暖かかった家は冷え、みんなが暗い顔をしている。

「ねえ……リクは？リク、もしかして今日は病院？それともおじさんと買い物にでも……？」

そんなことではないなんて、頭の中で理解はしていた。それでも、必死でそのことを否定したくて叫んでいた。

「リクはっ！？おばさん、リクは何処にいるんだよ！いるんだろっ！？リク！リク！」

それほど大きな家でもない。数分で家の中の隅々まで見渡すことができた。

それでもリクはいない……

庭へ出る。

いない

おじさんの工房へ行く。

いない

リクと出会った公園へ行く。

いない

いないいないいないいないいないいないいない  
いないいないいないいないいないいない  
イナイイナイイナイイナイイナイイナイイナイイナイイナイ  
イナイイナイイナイイナイイナイイナイイナイイナイイナイ  
イナイイナイイナイイナイイナイイナイイナイイナイイナイ

どこにも、リクはいなかった。

一週間。

リクの家付近を探した。

二週間。

商店街も探した。

三週間。

俺の家付近も探した。

一か月。

この街全体を探し回った。

そして半年。

リクは思わぬところで見つかった。

そこは、俺の家の地下室。

まさかと思つてそんなところには行っていなかったのだが、偶然聞いてしまったのだった。

俺の家の中で誰かが会話している。

壁越しだったが、ある程度聞くことができた。

「……はしょうがな……もう……し、見てい……ば  
彼は……地下……に？」

「……契約だ……。データが……。ばもう帰……。も良い」  
「しかし、……。罪では？……。しょう？何かあれば……」

「ぬかりは……。い……。が何とかして……。る」

‘彼’とは、誰なのか。

それはもしかしたらリクのことでは……？

‘地下’と言っていた。

そこに‘彼’がいるのか？

ほんの少しだけ見えた、希望。

リクはこの家の地下にいるかもしれない。

暗い暗い地下室。

それでも見間違えたりなどしない。暗い部屋の中に微かに明かりがあり、それによって顔が見えた。

椅子の上に座り、ピクリとも動かずに虚空を眺めているのは……  
……リク。

見つけた。

そう思ったが、誰か人が来る。急いで闇の中に身をひそめた。

やって来た者は合わせて三人。全員が見たことがある。否、知っている人達だ。

その会話、様子からすべてが理解できた。

リクをここへ連れてきたのは、あいつらだ。

許せない。

そんな感情と悲しみがこみ上げてきた。

何故、俺はリクがこんな近くに居たのに気付いてやれなかったんだ・・・？

何故、リクはこんなところに閉じ込められなければならなかったんだ・・・？

すべては分らない謎のまま、その後何回も隙をついてリクを逃がそうとした。

しかし、すべてが失敗に終わり、その部屋の鍵さえも見つからなかった。すべてが終わり、何も出来ないまま、数日後にリクが死んだことを知った。

俺はリクに何もしてやれないまま、一人、この地に立っていた。

雨が降ったら傘を差して

? (後書き)

\*次回予告\*

あいつの墓の前、俺はあることを誓った。  
どんなにづらい罪でも、俺はそれを背負ってみせる。

雨が降ったら傘を差して

？

冷えた体で身震いし、俺は手に持った花束を墓の前に置いた。

リク………

あいつを殺した奴らは分っている。そして、一体リクに何をしていたのかも。

あいつらがリクにしたことは、非人道的で重罪に値する。それでもあいつらが捕まらず、自由に暮らしているのは、陰で誰かが暗躍しているせいだろう。

「許せない者達が五人いる。でも、一人に対しては復讐出来ないだろうな………」

その一人は、どこの誰かも分らないのだから。

大きく溜息をつき、屈みこんでリクの墓と同じ目線に立つ。

「俺は、絶対許せないんだ。お前を殺した奴らと、それに手を貸した奴と………」

そこで、言葉に詰まった。このことをリクに言うわけにはいかない。

無理に笑みを作り、コートに付いているフードを深くかぶる。周りからは表情も素顔も見えなくなり、その上にさらに真っ白な仮面をつけた。

目元と口元が笑みの形に歪んだ真っ白な仮面を……………

「また、来るな」

そう言って立ち上がり、俺は墓地去る。

許せないものが五人。

まずは、一人……………

雨が降ったら傘を差して

? (後書き)

\*次回予告\*

第二話、死神と月光の樹

アルフェン町へ向かう電車の中でレオン達がであった人物とは？

？

あれから数時間後・・・

レオン、シエラン、サエは夜行列車の中にいた。

魔法と科学を上手く組み合わせた車体は揺れることがなく、普通の建物の中にいるようだ。防音も発達しているので室内は驚くほどに静かになっている。

三人の乗っている車両は四両目。夕方のため、そろそろ最後尾の六両目にある食堂車に人が集まる頃だ。しかし、三人はまだ室内にいた。

「全く、これは酷いだろ・・・」

「何がですか？」

レオンは頭を抱えて悩んでいた。今一番の悩みは目の前にいる。

簡単に言えば、将軍がシエランとレオンの部屋を一緒にしてしまったのだ。

・・・まあ、切符を受け取った時からうすうす感ずいてはいたのだが。

『安心せい』

シエランに聞こえないよう、こっそりとサエが耳打つ。

『もし貴様が氷華に手を出そうものなら、我が貴様をあの世へ送るからのう』

そう言いながらニコニコと笑うサエから出ていた、途方もない殺気は言うまでもない。シエランの指に触れただけで殺されかけるのは目に見えていた。

それで結局、このことについては考えないようにすることがレオンの中では決定したのだった。

『のう、後ろの方には行かぬのか？何やら人が集まっておるぞ』

「別に後でいいよ。ど〜せ、人が多すぎて待たされるんだから」

前足を器用に使ってレオンの肩をサエが叩いてくるが、軽くあしらった。サエに説明するため、この列車のパンフレットを取出したシエランのもとにサエは移動した。

「ここが今、私達のいるところで、その後ろがしょくどうしゃだつて」

『しょくどうしゃか。一体なんじゃ？それは』

「えっ・・・？う〜ん・・・分らない」

シエランがパンフレットを指さしながら説明しているが、随分とあやふやな説明になっている。どうやらシエランとサエは、色々なことについて疎いようだ。溜息をつき、レオンは話した。

「食堂車は、列車の中で食事が摂れる所だよ。夕食の時間だから、人が多いんだ」

『食事！！氷華、食事じゃ！早く行かぬのか！？我は待ちきれぬぞ！……』

妙なほどに興奮しているサエ。シエランも微かに頬を染めて嬉しそうである。

「よかったね、サエ。まともな食事なんて、何日ぶりだろうね！」

笑顔でシエランはそう言うが、発言は問題ありである。

「はっ？！二人して何日も何も食ってないの？！」

「うむ」「はい」

それならば今すぐに食堂車へ向かおうと言ったが、別に良いと二人は断った。しょうがないのでレオンはそのまま引き下がり、二人にこの国の仕組みを一から話すことになってしまった。

「まずは、この国の位置から説明するか・・・」

こうして、レオンのペピチエネチカ国講座が始まった。

？（後書き）

\*次回予告\*

ペピチエネチカ国の歴史、政治についてのレオンの大解説！

？

この国は、日本とアメリカの間、太平洋の中央に位置している。面積はアメリカよりも少々大きい位。五つの島が東西南北とその中央にそれぞれあり、その島にある山。それが柱となってペピチエネチ力国を支える形となっている。

「・・・で、その面積って言うのが島とその上にある土地を合わせた物なんだ」

白く発光する魔方陣を床に張り付け、そこから映されている映像を指差しながらレオンが説明している。その映像には、ペピチエネチ力国の下にある島や地図が映されている。

「随分と変わった国ですね・・・」

映像を凝視しながら、シエランが驚いている。これはよくある反応だ。

「じゃ、次は簡単な歴史な。さつき話した島と上にある土地の間は、厚い雲で覆われているんだ。だから、海外で航空技術が発展するまでこの国は他国に知られていなかったんだ。そこに島があるってのは分かってたようだけど」

そして、初めてアメリカから日本へ向かって飛行機が飛んだ時。地図に載っていない巨大な島が太平洋にあることを知り、その五つの島を詳しく調べたところ、このペピチエネチ力国が発見されたのだ。

それまで外国では化学が発展しており、そのことを全く知らなかったこの国の人々は魔法を発展させていた。そして、海外から様々な技術、政治形態を学び、今の状態に至る。

「つてことだ。じゃ、次は現在の政治体系な」

「はいっ！先生！」

『さっさと聞いて飯に行くぞ』

いつの間にかレオンを先生と呼ぶシエランである。映像が変わり、今度はヒエラルキーを現すグラフへと変わった。

「この国は大まかに言うと三人の大總統によって統治されている。

これは、独裁政治になるのを予防するためだ」

「独裁政治・・・？」

『一人の人が国を自由自在に動かすことじゃな』

良い考えだとサエは頷き、話を進めるようレオンを急かす。

「中央司令部は、その大總統の下に大将、中將、少將、准將、大佐、中佐・・・と続いている。その他の司令部は將軍が二人トップに立ち、そこから大佐、中佐、少佐、大尉・・・つてぐあいに続いている」

「という事は、將軍は准尉と大佐の間つてことですね」

「ああ、中央以外の司令部のトップだな。その二人の將軍が責任者と言う事だ。じゃ、次はそれとは別にある国家魔術師と科学技術師についてな」

それからの話は少々長かったので要約すると

- ・ 国家魔術師は軍事政権になってから始まり、その後海外と交流を持つようになってから科学技術師が始まった

- ・ 国家魔術師の仕事は魔法が使用されたと思わしき事件の解決か、科学技術師との合同研究である

- ・ 科学技術師の仕事は科学が使用されたと思わしき事件の解決か、国家魔術師との合同研究である

- ・ 両方共にランク付けがされており、下からB、A、S、SSとなっている。そのランクは軍上層部の者達が資格試験の成績やその後

の仕事の具合によって決定され、上下に変動、又はクビになることもある

・両方共Bなら中尉、Aなら大尉、Sなら少佐、SSなら中佐相当の地位を持つ

・給料はランクや仕事具合によって変わるが、比較的高い賃金が与えられる（仕事に使用したお金は、申請すれば軍が支払う）

「……ま、大体そんなところか」

「私は少佐の地位で、先生が中佐の地位だから、先生が私の上司ですわね？」

『そして我は大総統じゃな』

「アホか？糞猫が。そんなわけねえだろ。……後、いい加減先生って呼ぶのはやめてくれ」

「はいっ！！先生！」

「……」

先程の注意を聞いていなかったのか、元気良くシエランが返事をする。そのにこやかな顔に文句が言えず、大きく溜息を吐くと、レオンは魔方阵とその上に浮かぶ映像を消し去って腰を上げた。

「じゃ、そろそろ飯食いに行くぞ」

そう言ったレオンに続いて、急いでシエランとサエも立ち上がる。「はい！」

『やっとじゃな！我は待ちくたびれて腹ペコじゃぞ』

綺麗な黒い毛に覆われた腹を撫で、サエはレオンが開けたドアをすり抜けて先に廊下へと出てしまう。

「あっ！コラ！横入りするな！」

怒りながら勢いよくドアを開けてレオンが廊下へ飛び出す。閉じたドアを開けてシエランも彼らの後を追う。

「待って下さい！」

そして、また一人の少年と一匹の猫の鬼ごっこが始まった。

「二人とも！やめてください！他の人に迷惑ですよ！」

？（後書き）

\*次回予告\*

やっと食事を開始した一同。

そんな中、とあるハプニングで出会った人は・・・？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6398/>

---

第一章 人形の町

2011年11月20日19時33分発行